不可視のリスクに対処するために可動性と絆の狭間に生きる人々

ー日本社会と関わる外国人の語りから見えてくる「フクシマ」ー

WANG SHINUO

2011 年 3 月 11 日に発生したマグニチュード 9．0 の巨大な地震、それに起因する大津波および数日後の福島第一原子力発電所からの放射能漏れ事故は、福島県を中心に東北地方に甚大な被害をもたらした。放射能という不可視のリスクを前にして、日本ないし世界の人々が巨大な不安に襲われた状況があった。そして震災後 8 年が経った現在においても、除染作
業の先行きは不透明な状態にあり、その土地に暮らす人にとって、安心感を持って暮らすあるいは震災前の「日常」を取り戻しているとは、まだまだ言いづらい状況であることが感じられた。

グローバル化がますます進展する現代日本社会において、在日外国人の割合は年々増えている背景のもとで、筆者自身が在日外国人ないし「境界人」として、福島から遠い関西に住む生活とたとえ数日間であっても自分の目で福島を見た時とでは、自分の中の「フクシマ」がかなり変わったことが身をもって実感できたことである。その経験から、福島との距離が遠い（時間的にも空間的にも）という感覚を持っている外国人と、福島との距離が近いという感覚を持っている外国人の間では、何か共通していることあるいは異なることがあるだろうかと筆者は考えるに至った。こういった被災国における外国人の目から描かれる「フクシマ」はどのようなものであるのかという素朴な関心が本研究の基底に存在している。したがって、本論文では、東日本大震災及びそれに付随した福島原発事故において、日本社会に暮らす「境界人」である在日外国人が放射能リスクを如何にして認識・対処するかを明らかにすることにより、最終的には外国人のまなざしからみる「フクシマ」を描き出すことを目的とする。

本論文は、序章から終章の第五章で構成されている。序章では、筆者の福島旅をイントロダクションとし、東日本大震災による放射能リスクをめぐる実情を整理し、そして本研究において調査対象としている在日外国人に関連する先行研究を触れながら、在日外国人のまなざしからみる「フクシマ」の意義を提示し、さらに本研究全体をあらかじめ把握できるために3点の重要点を記述した。

第二章では、東日本大震災における在日外国人に関する先行研究を踏まえ、故に、震災直後の時期にこだわるものが多く、また長期的な視点から検討しているものが不足していること、さらに訪日である外国人と長年日本に滞在している外国人とを区別して論じる視点が少ないことが課題として見えてきた。そこから、日本社会の境界に生きる外国人それぞれのライフストーリーに着目し、彼らのまなざしを通した震災を描き出すという本研究の着眼点を明確にした。また、中国人を対象とする理由がより具体化しながら、福島産食品をめぐる震災後 8 年間における日中双方の実情を述べた。

第三章では、福島との距離が相対的に遠い、すなわち近年来日した震災未経験者である 24 名の留学生（それ以外に現在日本に在住していても、震災当時に福島以外の地域に住み、直接に震災を経験していなかった留学生も含む）を対象として調査した結果、彼らの福島産食品に対する態度とそれに影響する要因を人間関係、メディア信頼、被災地からの距離、日本滞在歴や将来進路、専門分野と中国人若者ならではの考え方といった6つの観点から整理することができた。また、彼らの語りから多様な「絆」及び自分の意識で移動できる「可動性」が少なからず見えてきた。こうした結果に基づき、さらに「長期滞在の人は、時間の経過による心理的変化がより明確になる」との新たな問いを抽出した。

第四章では、上述の問いを踏まえ、フクシマとの距離が相対的に近いすなわち震災経験（震災直後に福島に在住した人も含む）の外国人（中でも中国語話者）を対象者として語りの聞き取りを行った。具体的には震災後帰国した元留学生 2 人と震災後も福島に留まり続ける福島在住者 3 人の語りの詳細を分析し、「フクシマとの距離が相対的に近い」外国人のまなざしから個人の中の「フクシマ」の多様性の実情を描き出すことができた。

終章では、5 人のライフストーリーから、多様な「絆」に配慮した上での多様な「可動性」の選択が見え、また、「可動性」は長期的に存在する性質として、これからも人々が過去に作った「絆」を継承していく可能性が見えてきた。一方、第 3 章と第 4 章の調査結果を統合し、＜人間関係＞すなわち「絆」および＜被災地からの距離＞という影響要因は、「フクシマ」の諸相から個人にとって異なった内実が見えてきた。さらに、そこから在日外国人が文化コミュニケーションや震災復興の担い手としての可能性が見え、本研究が描写した多様なライフスタイルが、グローバル化社会における生き方の参考につながることを期待したい。（環境行動学）